

東北海区沿岸水温予報(2006年)

海域	経過 (11~1月)	現況(1月下旬~2月上旬)	見通し (2~4月)	見通しの背景	特異現象 (漁海況)
三陸北部 (青森県太平洋沿岸; 青森水試発表)	定線観測結果 12月 津軽暖流の各層水温は、表面、50m層、100m層ともやや高め、水塊深度が平年並み、津軽暖流の東方への張り出し位置がやや西偏 定地水温 11月:平年並み 12月:平年並み 1月:やや低め~かなり低め	定地水温 1月下旬~2月上旬:かなり低め~ はなはだ低め	津軽暖流域の水温はやや低めからかなり低め。 津軽暖流の東方への張り出しは、平年並みからやや西偏	12月定線観測結果では、各層とも高め、水塊深度が平年並みであったが、1月以降、定地水温が低めに推移していること。津軽海峡の表面水温が低めで推移していること。親潮の南下傾向が強いこと。 2月の日本海の定線観測結果では、対馬暖流の流勢が弱く、津軽海峡から尻屋崎東方への津軽暖流水の影響は少ないため。	下北半島の津軽海峡から太平洋側にかけての定地水温が1月以降、かなり低めで推移している。 陸奥湾の水温は、青森ブイ、平館ブイで、1985年以降最も低めで推移している。
三陸中部 (岩手県沿岸; 岩手水試発表)	11月 表面:概ね平年並~やや低め。 100m深:県中部沖合20海里付近でやや高めのほかは概ね平年並~低め。 12月 表面:黒崎沖合10~50海里でやや低め、尾崎沖合50海里付近でやや高め、楢島沖合50海里付近でやや低めのほかは概ね平年並。 100m深:県北部沖合でやや低め~低め、県中部沖合20~40海里から県南部沖合20~50海里にかけて平年並~高め。 1月 表面:沿岸北部と沿岸南部で平年並の他は、本県沖合全域でやや低め~低め。 100m深:沿岸南部で平年並、この他の海域ではやや低め~低め。	表面 本県沿岸・沖合の全域で、やや低め~極めて低め。 100m深 本県沿岸・沖合の全域で、やや低め~低め。	期間を通して表面、100m深ともにやや低め~低めで推移する。	衛星画像により表面水温を見ると、津軽暖流が弱勢であり、日本海側を北上する対馬暖流も弱勢である。 衛星画像により海面高度を見ると、金華山沖暖水塊が強勢である。 2月初旬の海洋観測の結果、50~80m深まで混合していることが観測された。	イサダ漁が3/1に解禁となるが、本県沿岸では小さいイサダ魚群は発見されるものの、濃密なイサダ魚群は観察されていない。
三陸南部 (宮城県沿岸; 宮城水試発表)	11~12月の表面水温は、概ね平年並~高めで推移した。100m深水温は、11月では北冷南暖のパターンであったが、12月には平年よりやや高め~高めとなった。 1月に入ると様相が一変し、北・中部沖合海域を中心に、表面、100m深とも平年よりやや低め~極めて低め(平年より2~6低め)となった。	2月上旬の表面水温は2~12であったが、5以下の親潮系冷水が広範囲に分布し、親潮系冷水の分布する海域を中心に平年よりやや低め~極めて低め(平年より2~5低め)となった。142°~142°50'Eの海域には南北に帯状に2台の冷水が分布した。100m深水温は3~11で、表面と同様に親潮系冷水が分布する海域を中心に平年よりやや低め~極めて低め(平年より2~4低め)となった。	142°E以西の沿岸海域と南部沖合海域では平年並で推移するが、他の海域では平年よりやや低め~低めで推移する。	「宮城県沿岸の海況予測モデル」により予測を実施。2006年2月の類似年は1977年2月と1981年2月。 1月下旬まで金華山沖にあった表面水温5°の南端緯度は、2月上旬に南下を開始し2月中旬には茨城県海側に達した(単純計算で11°/日の南下速度)。この沿岸親潮の勢力を弱める要素が見あたらな	・1月30日 38°N,142°30'Eの調査点で、稚魚ネットにクリオネが入網。 ・1月31日 38°30'N,142°50'Eの調査点で、10頭以上のマッコウクジラの群れを確認。 ・2月16日 巻網により230t以上のコノシロが石巻魚市場に水揚げされた。
常磐北部 (福島県沿岸; 福島水試発表)	11月:親潮系冷水の目立った波及はみられず、黒潮系暖水の勢力が強、100~200m深付近の範囲を中心にして瀬側まで波及した。水温は平年並みであった。 12月:沖合より波及した親潮系冷水が塩屋崎沖50~75海里付近にみられた。黒潮系暖水の沖合からの波及が顕著であり、100~150m深付近の範囲を中心に分布している。水温は平年並みであった。 1月:黒潮系暖水の沖合からの波及が顕著であり、鉛直混合が進み表面から200~300m深付近まで黒潮系暖水が分布していた。親潮系冷水の勢力は弱く、水温は平年並みであった。	本県中南部海域の30~50海里付近から本県沖北部海域の広範囲にわたって親潮系冷水の波及がみられた。水温は全体的に降温傾向で、平年より低めとなった。	50海里以内の沿岸は、2月は低め~やや低め、3月以降はやや低め~平年並みで推移すると予想される。	期間当初は親潮第一分枝の南下が顕著であり、水温は平年より低め付近で推移するとみられる。しかし、親潮系冷水の南下傾向はやや弱まる兆しをみせており、期間後半は本県沖には冷水域が残るものの、親潮系冷水の北よりの波及は平年並みの断続的な波及にとどまるとみられる。	2月に親潮第一分枝の先端の南下が顕著であり、本県沖の表面水温で1台が観測された。

常磐南部 ～鹿島灘 (茨城県沿 岸; 茨城水試 発表)	11月以降黒潮はN型で南偏傾向に変化し、北上暖水の勢力が弱まった。 11～12月は、鉛直混合が進み表層から水深150～200m程度は均一な水塊に覆われ、沿岸水温は平年並みで推移した。 1月までは親潮系冷水の南下は見られなかったが、黒潮が南偏したため、沿岸水温はやや低い～「低い」へと変化した。	2月序盤は1月と概ね同様の傾向であったが、その後急速に親潮系冷水が南下した。 沿岸水温は、海洋観測時には「やや低い」～「低い」で推移したが、現在は「低い」～「非常に低い」に変化していると推定される。	2月～4月までの沿岸水温は、概ね「低い」～「非常に低い」となる。 鹿島灘沿岸域では、暖水舌形成時に、表層のみで「やや低い」～「平年並」と予想される。	類似年解析では「冷水パターン」となり、本県沿岸海域では負偏差が継続すると予想される。 黒潮はN型で、小蛇行が九州東方に発生しているものの、今期中にはその影響はなく南偏傾向が継続し、負偏差を崩すような影響を及ぼさない。 親潮系冷水は、強弱を繰り返しながら段階的に南下を繰り返す。この南下を阻害する要因は見あたらない。	秋期から1月にかけてエチゼンクラゲが入網した。 2月13日のシラス調査点で、36°15'でクリオネが採補された。
--	--	--	---	---	---

各階級の水温平年偏差の範囲

階級区分(出現率)	三陸北部	三陸中部		三陸南部	常磐北部	常磐南部～鹿島灘
		距岸10海里内	距岸10～70海里			
極めて高い(2.5%)	+2.4 ~	+4.0 ~	+6.0 ~	+2.4 ~	+4.0 ~	+4.0 ~
高い(7.5%)	+1.6～+2.3	+2.5～+3.9	4.0～+5.9	+1.6～+2.3	+2.5～+3.9	+2.5～+3.9
やや高い(20%)	+0.7～+1.5	+1.0～+2.4	1.5～+3.9	+0.7～+1.5	+1.0～+2.4	+1.0～+2.4
平年並み(40%)	+0.6～-0.6	+0.9～-0.9	1.4～-1.4	+0.6～-0.6	+0.9～-0.9	+0.9～-0.9
やや低い(20%)	-0.7～-1.5	-1.0～-2.4	1.5～-3.9	-0.7～-1.5	-1.0～-2.4	-1.0～-2.4
低い(7.5%)	-1.6～-2.3	-2.5～-3.9	4.0～-5.9	-1.6～-2.3	-2.5～-3.9	-2.5～-3.9
極めて低い(2.5%)	-2.4 ~	-4.0 ~	-6.0 ~	-2.4 ~	-4.0 ~	-4.0 ~